

カタカナ用法の再考



小林 昭 雄*

Reconsideration of katakana usage.

先日、本研究科で大変活発に教育・研究を進めておられる先生から応用自然科学科を指向した学生に、何とか化学的事象に興味をもつ人材を一人でも増やすことができるような化学入門書を書きませんかとの誘いを戴いた。

近年の自然科学の境界領域研究の進展は目覚ましく、謎に包まれた部分の多かった生体内の諸反応が純粋な化学反応として理解できるようになってきた。特に、最近の生化学のテキストブックは、日進月歩に最新の情報が公開される中、記述が2年ともたないとの印象を強く感じる。もし時間が許せば、本を著す際の参考に一度書店で生物化学系の書物を覗かれてはいかがでしょうか。本当にカラフルで細胞内の諸反応が見てきたかのように描写されています。その中で汎用されているテクニカルターム (technical terms) は、共通言語として使えるように然るべき日本語に訳されて用いられているものもあれば、少し専門的になると英語読みをそれらしい発音としてカタカナで表わそうとしたものなど、様々な例に出くわす。しかし、著者の意図は感じられるものの首を傾げなくなるカタカナ表現にしばしばお目にかかるし、de, di, gi,

ji, zi などの表音転換が的確でないため間違いとも受け取れる例がかなりある。したがって、特に専門の書物を著す場合、あるルールがなければならぬのに、カタカナ表現への変換法則など教えられたこともなく、全くといていいほど自分流である。ますます、専門用語辞典には、それような語の数が増加してきているが、外来語を的確に用いるべく、いちいち辞書に頼りながら作文するきまじめな人はめったにいない。

我々が共通の認識をもって表音表記を実行するためには、新しい辞書類を作成して最新の語句の表現を逐次盛り込むべきであるが、これだけ進歩が激しいバイオ・ハイテクの分野では改訂、増補を毎月のように繰り返さねばならず、それは不可能に近い。また、個々のテクニカルタームに対応する使用を奨励する日本語訳は、学会など共通な場で論じられることはほとんど無のが現状である。英語は万国共通語であるから、アルファベット表記の単語をそのまま記載するのが最も親切と言わざるを得ない。アジア諸国の言語の中でインドネシア語、マレーシア語のように横書きでアルファベットを使うのであれば、英語の単語を文中に挟んでも全く問題がないようにおもえるが、日本語の文章に英語の単語がごろごろ並ぶのは、いずれにしても美しくはないし、新聞のような縦書き文では違和感がありすぎる。

こんな最近の経験から、外国生活の際直面した bitter experience の中で、発音の悪さに自己嫌悪に陥っていた時期のことを思い起こし、カタカナ用法の改善が少なからず必要と思っ

*Akio KOBAYASHI
1945年5月4日生
昭和43年京都大学農学部農芸化学科卒業
現在、大阪大学大学院工学研究科、
応用生物学専攻、教授、京大農博、細胞工学
TEL 06-879-7423
FAX 06-879-7426
E-Mail kobayashi@plant.bio.
eng.osaka-u.ac.jp



いた当時の執念を再確認してしまった。何せ、大変貴重な時間をどのくらい語学学習に費やしてきたか？ 特に英語教育に対して。まず、小学校低学年で平仮名を学び、引き続きカタカナ表現を、その後ローマ字を修得し、そして、中学で英語を学習する。

英語を書いたり、ヒアリングから英語スペリングを想起するとき、だれでも、エル(L)とアール(R)の発音に当惑した経験を少なからず持ち合わせていると思う。

では、この混乱は解消できないのであろうか。外来語や動植物種名、また、強調表現を目的としてカタカナ表現がなされたのは、中国語や韓国語などと比べて非常に賢明な選択であったと思うものの、いつからカタカナは使われだし、その後発音がよりフォネティック(音声表記的: phonetic)になるための試みは一体全体、どのようになされたのであろうかと、ふと疑問をもった。もし、少なくともエル(L)とアール(R)の区別は、低学年時かあるいは、日常頻繁に出くわすなどの刺激を通じて体験できるのであれば、今と違った効果が期待できよう。

生半可の知識にて、恥ずかしい限りであるが、あえて言及すれば、漢字から派生したカタカナの歴史はかなり古い。ただ平仮名と対応して現在の五十音がいつ完成されたかは定かでないようだが、古今和歌集の中にも、カタカナと平仮名とが混じりあって使われていた。一説によると、その形の優美さから平仮名は、平安の時代、女性が好んで使い、カタカナは、男性が使ったと言われているが、必ずしも当てはまらないようである。いずれにしても、漢文を主軸とした書き言葉は中国語由来であるため、カタカナは、それを根幹として訓的表現を織り込んだ文章をつくった際、漢字をつなぐ目的のために挿入的に用いられたようである。歴史資料から明らかのように、漢文としての表現をそのまま訓的に理解しやすくしたのであろう。

欧米の発音をカタカナを使ってできるだけフォネティックに表音文字化しようと試みた例は確かにあった。や(ya)行のうい・いえ、わ(wa)行のうい・うう・うえ、また、うあ(va)うい、うう・うえの表音は、それなりに存在してい

た時期があった。しかし、現在は一部を除いてかなり風化している。表現は、時代と共に簡略化をたどり、より機能的に進化するの趨勢であろうが、ことサイエンスの分野において、外来語がこのように頻繁に使われだすと、言葉のより本来的な表音表現への工夫を促すことが必要に思える。しかも、多くの文章がワープロで書かれる時勢において、ローマ字入力で作文する場合は、ほとんど労力を取らない。ただ、入力ソフトを一部改良して、ドイツ語のウムラウトのごとく、目下使われているカタカナを別の文字に変えることなく、一部条件を付加することで容易に目的が達せられると思われる。

Violinは(ヴァイオリン)としばしば表現される。ここでのヴは(v)として理解できるが、ラ行は、・R・を伴うのか・L・なのか？ 困ってしまう。ラ行の発音は、我々が最も混乱する表音である事は痛いほど分かっており、何とかしなければいけないと思うのは私ばかりではないと思う。

NHKのニュースでも、外国の地名は、人名も母国語にできる限り近い発音で表現するように努力している姿勢が感じられる。でも、字幕スーパーに関しては、読みにくいこともあってシンプルな表現に努めているように見え、必ずしも音声表記的(フォネティック)ではない。

中国での学会の際、西安の兵馬俑を見学した。そこでは、各国の研究者が集うなか、国際共通語(英語)で説明がなされた。参加者は、うなずき秦時代の文化に感嘆していたが、小生には、説明の中で、人名と地名が理解できなかった。発音が全く違うのである。漢字を見て何とかおよその事は解ったものの英語のパンフレットや地名などフォネティックで今まで聞いた事のない音の並びであり耳からなど理解できるはずがない。

英語に関しては、それなりに自信をもっていった者としては、何を託つか。日本語の中でのカタカナ表現において、音声表現の工夫のなさをしばし嘆くしかなかった。

米国人を案内して選挙の街頭演説現場を通りかかった。「エレクションですよ」と説明した。彼は奇妙な顔をして、私の方を見返した。erec-

tion or election?? とんでも無い発音の違いであるし、手紙など急いで書いて、コンピュータ上でスペルチェックなどかけてもこの両者はスペルチェック辞書中にあり、コレクト(correct × collect)である。だから・R・と・L・とを明確に区別するカタカナがあってもいいではないか。

米国で講義をする機会に、終了後学生に講義の印象を尋ねた。総じてインプレッシヴであったようだが、とっさの板書の折りに書いたスペリングでRとLとが逆さまであったらしい。このような、間違いは、見苦しいを越したものであるらしく、コンピュータでスペルチェックをかける場合、母音の違いなどは、正してくれるものの、RとLの間違いは、全く「該当単語無し」の応答をうける。進んだ欧米のソフトでも、彼らにはあり得ないミスを正す機能などあるはずもなく、もし、それに対応するとすると、日本における特殊なソフトを作成するしかない。

RとLとを混同しそうな外来語は例を探し出したらキリがない。

ちなみに、ちょっと思い起こすだけで、ライト(right, light), ランプ(ramp: 交差点, lamp), バレー(silicon valley, volley ball, ballet), レース(race, lace), ロー(raw: 主の, law: 法律, low: 低い), レーク(rake, Lake), ライス(rice, lice), リーダー(reader, leader), ローン(loan, lawn: 芝), ラック(rack, lack, luck), ロック(rock, lock: 施錠), ランク(rank, lank: やせた)等、すぐさま出てくる。だからカタカナを一見したとき、・R・か・L・かのどちらから始まるのかで意味が大きく違ってしまう。

以下に・R・から始まる、外来語を示してみようと思いがけないほど多いのに驚く。

ラビット(rabbit), ラケット(racket), レーダー(radar), ラジエーター(radiator), ラジオ(radio), ラフト(raft), ラッグ(rag), レール(rail), レインボー(rainbow), レーズン(raisin), ラリー(rally), ラム(ram), ランダム(randam), ランク(rank), レイプ(rape), レア(rare), ラスカル(rascal), ラッシュアワー(rash hour), ラット(rat), レート(rate), レ

イショ(ratio), レザー(razor: 剃刀), リアクション(reaction), リバース(reverse), リバイバル(revival), リーチ(reach), リブ(rib), リボン(ribbon), リアリティ(Reality), リヤー(rear), リコール(recoil), レシーブ(Receive), レセプション(reception), リード(reed: 葦, lead), レシピ(Recipe), レコード(record), レッド(red), リール(reel), レフリー(referee), リフォーム(reform), リフレッシュ(refresh), レジスター(register), レギュラー(regular), リラックス(relax), リレー(relay), レリーフ(releaf: 浮き彫り, リリーフ: 救援), リモート(remote), レント(rent), リクエスト(request), レスキュー(rescue), リサーチ(research), レジデンス(residence), リゾート(resort), レジューム(resume), レビュー(review), ローデシア(Rhodesia), ライフル(rifle), リスク(risk), ロード(road), ラースト(roast), ロック(rock: 岩), ロッド(rod: 竿), ロマンс(romance), ルーフ(roof), ローズ(rose), ロゼット(rosette), ロジン(rosin: 松ヤニ), ローテーション(rotation), ラフ(rough: 荒い), ラウンド(round: 丸い), ルート(route), ロイヤル(royal: 王国の), ラバー(rubber), ルビジュウム(rubidium), ルビー(ruby), ルール(rule: 規則), ランニング(running), ラッシュアワー(rush hour), ライ麦(rye)など。

また、Lから始まるカタカナには、ラベル(label), レース(lace: ひも), ラック(lack: 欠乏, luck: 幸運), ラッカー(lacquer: ラッカーニス), レディ(lady: 貴婦人), ラム肉(lamb meat), ランド(land), ランドマーク(land mark), ランタン(lantern), ラーク(lark: ヒバリ), ラッシュ(lash: 皮肉, まつ毛), ラスト(last), ラテックス(latex: 樹液), レジャー(leisure: 暇), レンズ(lens), レター(letter), レベル(level), ライセンス(license), ライフ(life), リフト(lift), リリー(lily), ライム(lime: 石灰), ライン(line), ライオン(lion), リットル(liter), ローカル(local), ロッカー(locker), ロック(lock), ロッジ(lodge), ロフト(loft: 屋根部屋), ロンドン(London), リジン(lysine)などがある。

このように日常の生活でよく出くわすカタカナ用法の中で、・RとL・を意識することなく使っている単語の多いのに驚く。ましてや単語の中間にラ行の表音が出てきた場合などとなると恐ろしい数になる。

上記の単語の中で、中学時代以降の最初の出会いが英単語であったものは、比較的RかLの区別が付き易いが、耳から最初に入れたものは混乱するが多い。例えば、ラ行でR音があるものに、単語のどこかに小さい四角い印などがあつたとして、それにしばしば出合うならば、このような間違いは起きない。高校生になった娘に、この話をしてみた。彼女が言うには、「カタカナで表記された単語を英語辞書で調べるとき、きっとすごく楽だよ。それに、今のワープロでも、vaと打てば、ヴァ・と、またDHIと打てば、でい、ディとでるもん」と賛同してくれた。

このほかに、di音とji音、zi、f音とh音など、一定のルールに乗っ取って表現することが習慣づけられれば、日本における英語教育は、新しい局面を迎えるように思う。

前文で触れたが、サイエンス分野でのテクニカルタームの表現にこれらを採用できれば、その意義は大きい。例えば、エル(l)音を含む単語の方が少ないからbold体で表すとすると、ガソリン、ジベレリンのようになり、後者においては、通常用法であるレはアール(R)音であることになり、恐ろしく恥ずかしい間違いは犯

さなくなるであろう。そして、欧米語でb音を含むもの、v音を含むものにもこのようなルールが適用されれば便利かと思われる。

米国生活の最中、カタカナ表現への工夫について、帰国して是非ともスピークアップしてみたいと思っていたが、留学20年後の今、欧米語と派生する無秩序なカタカナ用法の反乱の中、書物を著す機会に再度こみ上げた思いを綴ってみた。是非ともこの問題を真剣に討議する機会作りを若い世代の方々に期待したい。そして日本語研究会なり、理科系学会の活動部会などを通じて最も理にかなった新カタカナ用法をクリエイトして戴きたいと思う。ローマ字や英語での入力が容易なワープロの進化した時代に、英語のスペルを直接、あるいはローマ字でのそれらしき表音を入力すれば、即座に推奨するカタカナ表現が画面に提示されるような、独自の文字ソフトを作り出すことは、それほど難しくはないのではなかろうか。このためには、ワープロソフトを作成している企業の方の協力がなければ実行できない。

もし、こんなカタカナ用法の改良に共感していただける方がおられれば、e-mailでコメントを戴きたい。そして近い将来、機能的なカタカナ用法についての談義に加わっていただければ幸いに思う。

E-mail:

kobayashi@plant.bio.eng.osaka-u.ac.jp

